

5 宇陀市の民俗芸能にみる 歴史的風致

(1) はじめに

神仏に対し、供物を供える場面は、どの行事でも見ることができる。ところが、神仏の前で芸能・競技などを演じる事例となると、現在の宇陀市内では数えるほどしか残っていない。かつては、雨乞のため、先祖の霊を慰めるため、氏子の息災を願うため、娯楽的要素を含んだものなど、市内各地で様々な形の奉納芸能が見られた。

例えば、雨乞のための踊りでは、室生大野の^{かいじんじゃ}海神社で秋祭りに奉納される「いさめ踊り」、先祖の霊を慰める踊りとしては安産寺・宇太水分神社の盆踊りが知られている。五穀豊穰の感謝と無病息災を願う踊りとして龍口白山神社、龍穴神社の獅子神楽が挙げられ、娯楽的要素を含んだものとして阿紀神社の能が挙げられる。

こうした奉納芸能の歴史は、^{もんじょ}文書で確認できるものとして、後述する大野のいさめ踊り（大正2年の歌本）や、『御用部屋日記』に残る阿紀神社の献能、『宇太村風俗誌』（大正4年（1915）宇太村役場）による古市場の盆踊りがある。このほか、『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））には盆踊り、獅子舞に関する記録が収められており、少なくともそのころから行事が続いていることが確認できる。

現在でも良好な歴史的環境を舞台に繰り広げられるこれらの営みについて、以下のことについて述べる。

5-1 大野のいさめ踊りにまつわる歴史的風致

5-2 宇陀市の盆踊りにまつわる歴史的風致

5-3 宇陀市の獅子舞にまつわる歴史的風致

コラム 4 阿紀神社の神事能

5-1 大野のいさめ踊りに まつわる歴史的風致

(1) はじめに

室生大野は、宇陀市の東部に位置する集落で、青越え伊勢街道の宿場町として発展した。また、室生寺の北の玄関口として位置づけられており、大野寺を経由して、室生寺へ続く道が分岐していた。現在では近鉄室生口大野駅が置かれ、通勤客のほか、室生寺への観光客が往来する。

室生口大野駅から東南 100m の位置に大木に囲まれた森があり、そこに「海神社」が鎮座している。入口に石鳥居が設けられ、石段を登り切った平場に拝殿・能舞台・社務所が、更に石垣を積んで高くした位置に本殿が置かれている。

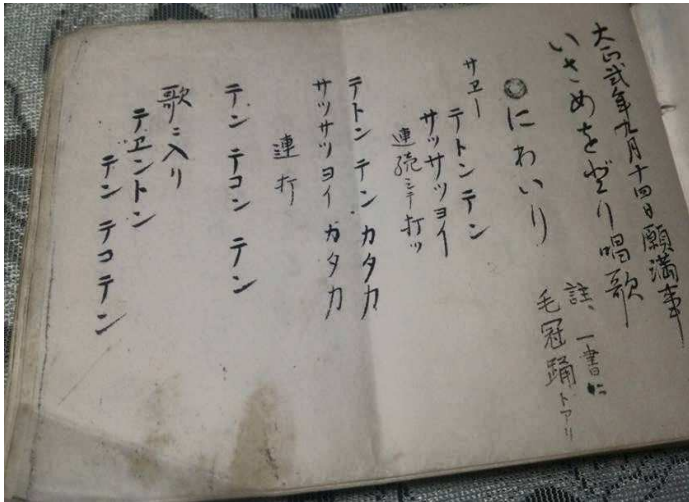
由緒は定かでないが、応永 3 年(1396)に三本松の海神社とともに、室生の龍穴神社から善女龍王を勧請して祀ったと伝わり、雨乞の神として知られている。

大野の海神社では、毎年の秋祭りで「いさめ踊り」が奉納されている。一般的には「^{いさ}み踊」「太鼓踊」「雨乞踊」と呼ばれているが、(大正 2 年(1913)『山本家文書』)の歌本に「いさめをどり」とあることから、大野では「いさみ」と言わず、「いさめ踊り」と呼んでいる³³。

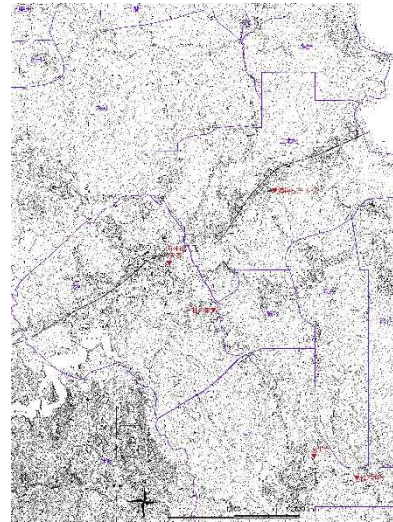
この踊りは、雨乞の願掛けや雨乞の願ほどこや、豊作祈願の満願や祈願成就のお礼として神社の神前で行われる踊りである。雨乞の際には、古大野岳(通称ダケ)へ松明を持って登り、火を焚いて雨雲を呼んだと伝わる。

かつては三本松の海神社でも「いさみ踊」があったが、昭和 41 年(1966)を最後に休止している。一方大野では、大正 2 年(1913)の雨乞のときに踊った人たちの指導を受けて踊りを継承した「大野いさめ踊り保存会」により、昭和 52 年(1977)から毎年秋祭りで神前奉納を行うようになり、今に至る。

³³ 同じ系統の踊りでも、伊賀側では「^{そうもくおどり}艸木踊」といい、奈良県添上郡・山辺郡・宇陀郡内は「^{いさ}み踊」という。『山辺郡誌』(大正 2～5 年(1913～1916)、奈良縣山邊郡教育會編)に「元禄九年八月二十日石上社ニ於テ大踊二回、勇踊二回、参籠二回、臨時祭ヲ行ヒ、大旱ヲ禱フ」と記されていることから、江戸時代中期には踊られていたとみられる。『地域社会の民俗学研究』(1987 年、岩井宏實 著)の「大和の太鼓踊り一覧」によると、奈良市大柳生の夜支布山口神社は「太鼓踊」、天理市新泉大和神社は「ユカタ踊」、奈良市都祁村吐山は「太鼓踊」、吉野郡国栖は「太鼓踊」、宇陀市室生三本松では「いさみ踊」と呼ぶ。



大正2年（1913）奉納時の唄本
※写真撮影および提供 小関吉浩氏



大野と三本松の位置関係

（２）建造物

【^{かいじんじゃ}海神社】三本松の海神社とともに、室生の龍穴神社から勧請されたと伝わる神社。境内地は1980坪あり、そこに本殿、拝殿、舞殿、社務所が並ぶ。いさめ踊りはこの神社を中心にして繰り広げられている。



海神社境内

【海神社本殿】県指定文化財（建造物）

森を背後に本殿が西に面して配置されており、三間社流造、檜皮葺き。正面屋根の両端に千鳥破風を設けている。建築年代は定かでないが、奈良県文化財指定説明によると、形式・手法からみて江戸初期頃と推定されている。



海神社本殿

【大野寺本堂】

宇陀川の畔に建つ古刹で、伊勢街道から室生寺へ向かう際の北の玄関口として位置づけられた寺。いさめ踊りでは、海神社へ戻る前に踊りを披露する場所になっている。雨乞で踊ったときも、必ず大野寺を經由していた。

本堂は方三間、入母屋造、棧瓦葺で、向拝虹



大野寺本堂

梁上部とその木鼻に彫刻が施されている。境内に残る石碑によると、大正 10 年（1921）落成とある。

（３）活動

【いさめ踊り】

大野のいさめ踊りは、かつては雨乞の踊りで、『室生村史』（昭和 41 年（1966）池田末則 編）によると大野と向湊の境目にそびえる古大野岳に登って火をおこし、松明を掲げた一行が、大八車に載せた太鼓をたたきながら下っていき、集落の要所で踊り、大野寺を経由し海神社まで練り歩いたという。

雨乞を必要とする状況が殆どなくなって久しいが、昭和 55 年（1980）に「大野いさめ踊り保存会」が結成され、大正 2 年（1913）の雨乞時に踊った人やそれを見ていた人から節回しや踊りの形を習い、海神社の秋祭にて奉納するようになった。

いさめ踊りは、現在、「庭入り」「お寺踊り」「屋敷踊り」「花見踊り」が伝わっており、保存会設立当初は大人だけで踊っていたが、数年後には踊りの伝承のため子供にも教えるようになり、この流れは現在も続いている。

踊りの稽古は 9 月半ばから始まる。大野は「上出」「下出」「^{かみで}緑川」「^{しもで}西垣内」「中山台」にわかれており、いさめ踊りは主に「上出」「下出」「^{みどりかわ}緑川」の人が踊っている。唄い方は同じだが、上出とそれ以外では踊り方に微妙な違いがある。上出は安養寺に、下出・緑川は緑川集会所に集まって練習をする。秋祭りの少し前に海神社の長拝殿で合同練習を行い、本番の日を迎える。

いさめ踊りが奉納されるのは、秋祭の宵宮である。晴天時は海神社境内の砂利敷きの「にわ」で踊り、雨天時は長拝殿で踊る。大きな宮太鼓を横置きにし、唄に合わせて太鼓の裏に立ち御幣を持った心棒打ちが掛け声をかけ、4 人の太鼓打ちが太鼓のまわりを時計回りに入れ替わって低い姿勢で太鼓を打つ。最初に全員で「庭入り」「いさめ踊り」を踊ったあと、子供たちによる「お寺踊り」が続き、踊り手は大人に替わる。



寄進者を記した石碑

まずは上出により「屋敷踊り」が披露され、続いて下出・緑川により「花見踊り」が披露される。踊りの奉納が終わると、神事が執り行われ、続いて地域の女兒による浦安の舞が奉納されて宵宮は終わる。



令和元年（2019）10月14日練習風景
（こどもいさめ）



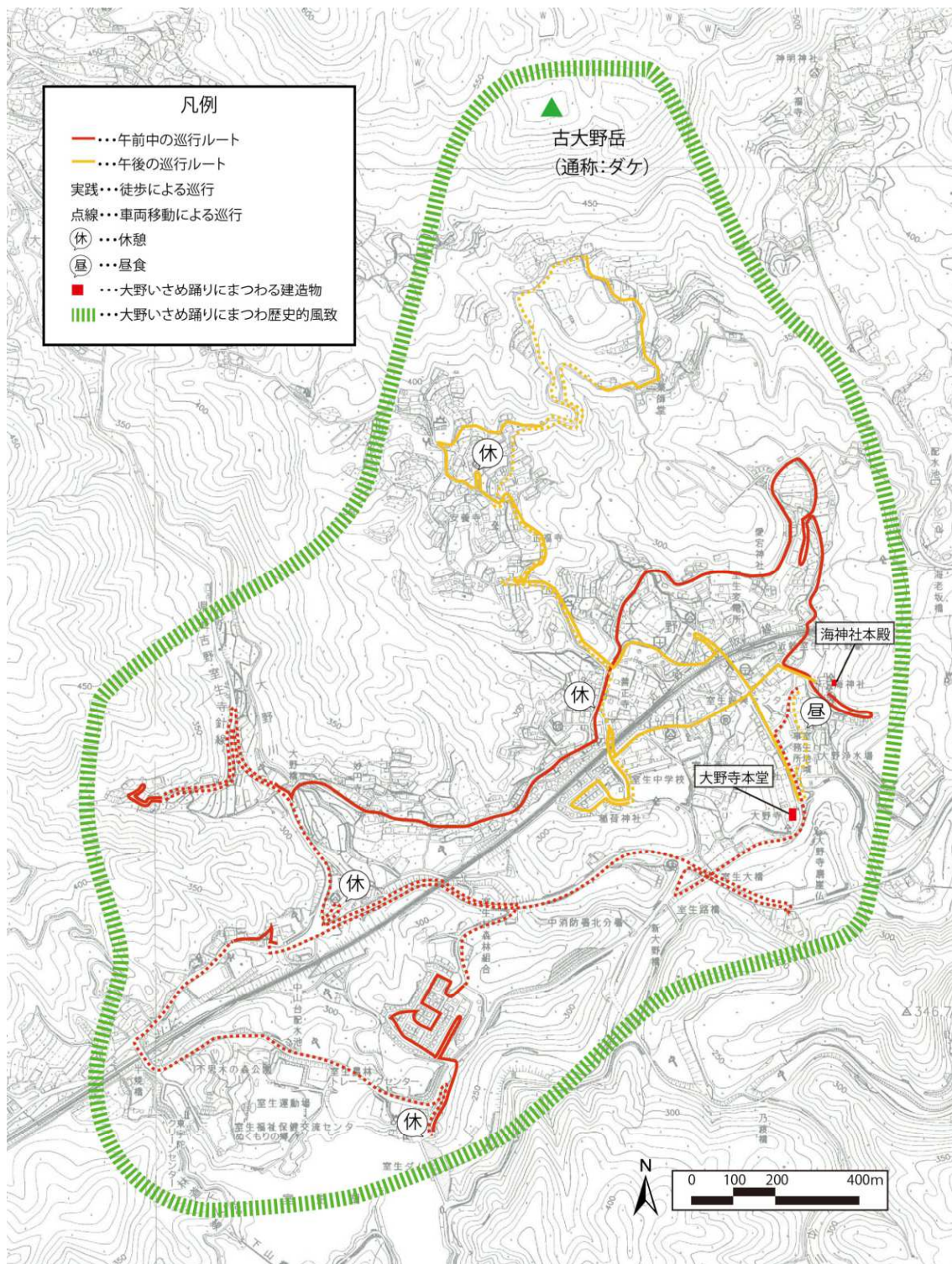
2019年10月19日宵宮（大人いさめ）

翌日、秋祭では次頁の図のとおり、太鼓台が大野の集落内を回る。朝、海神社を出発し、下出→緑川→中山台を練り歩き、幾度か休憩をはさみ大野寺を経由し海神社へ戻って昼食をとる。午後からは、上出の集落をまわり、再び大野寺を経由して海神社へ戻る。ダケから徐々に下る午後の行程は、雨乞いをしていたころの行程とほぼ重なる。

（４）おわりに

現在では、基盤整備の充実や、天気予報による荒天等の備えができるようになったため、かつてのように干ばつや豪雨に苦しみ、天に祈りを捧げる機会はほぼなくなったとみられる。しかし、いったん途絶えるかに見えた雨乞の踊りである「いさめ踊り」は、地元有志によりその価値を見出されて復興され、現在では五穀豊穡の感謝を捧げる舞とともに、秋祭で奉納されるようになった。

毎年、9月半ばから秋祭りにかけて海神社境内や集会所で練り広げられる練習風景や、秋祭本番に太鼓台とともに伝統的な農村景観が残る集落全体を練り歩く様子が、大野のいさめ踊りにまつわる良好な歴史的風致を形成している。



大野海神社秋祭りの太鼓台巡行ルート

5-2 宇陀市の盆踊りに まつわる歴史的風致

(1) はじめに

盆踊りは、その起源には諸説あるが、盆の時期に死者を供養するための行事で、日本全国どこでも見られる行事である。娯楽としての側面も強く、集落の結束を強める役割も果たしていた。

『宇太村風俗誌』(大正4年(1915)宇太村)によると「盆踊 場所 氏神境内 踊手 村の青年男女 服装 浴衣に白足袋手拭かぶりして 時期 七月十八日十九日両夜 踊り方 サイモン踊 山踊 歌謡 サイモン音頭 川端音頭」とあり、集落内の広い場所(お寺や神社境内であることが多い)に櫓(以下より「音頭台」という。)を組み、その櫓を中心に輪になって踊る。盆踊りには音頭取りがいて、回り手(輪になって踊る人)は踊りながら合いの手を返す、というやりとりがある。

実施主体は集落・檀信徒・氏子など様々で、各組織の青年団が中心となって運営する。あるときに青年団から地元自治会やまちづくり協議会等に運営を移管して現在まで行事を続けてきた。

室生ではかつて8つの小学校区でそれぞれ盆踊りがあり、日程をずらして、各小学校区の青年団が協力しあって運営を行っていた。現在でも、安産寺の盆踊り、龍口の盆踊り、古市場では宇太水分神社の盆踊りが続いているほか、榛原萩原の楽盆踊りのように近年復活させた地域や、各地の夏祭りイベントの余興として盆踊りをしているところもある。

宇陀地方の盆踊りでは、音頭台の上に花笠を設けている事例が多い。音頭台の上に音頭取りが立ち、音頭を取って盆踊りが始まる。この音頭取りは、外部から呼ぶ場合と、自分たちで音頭取りまでやる場合がある。古市場・三本松・龍口は後者であるため、土着の音頭が歌い継がれてきたと考えられる。戦後になって、炭鉦節や河内音頭などの音源が入ってきたが、それまでは祭文音頭、金魚踊り、住吉音頭、土山の4曲だけで踊っていたと伝わる。

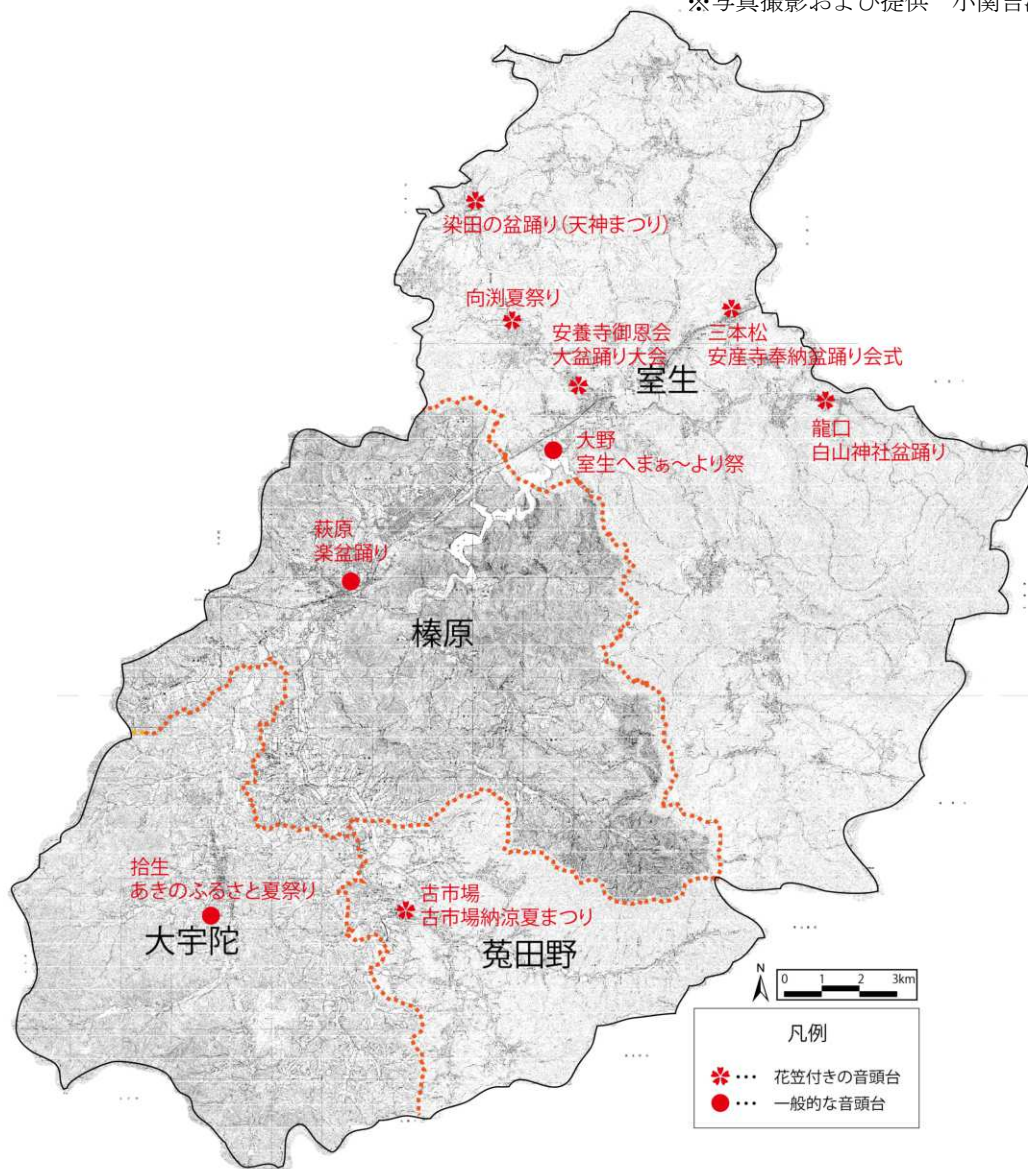


安養寺御恩会大盆踊り大会の音頭台※



龍口白山神社の音頭台※

※写真撮影および提供 小関吉浩氏



宇陀市内で開催される盆踊り分布図

(2) 建造物

【宇太水分神社本殿】

2-3 (2) 建造物を参照のこと。

【旧宇太小学校】

木造二階建て、スレート葺き、寄棟造。菟田野古市場の北西にある。昭和 10 年 (1935) に火災のため焼失した校舎にかわって新築された建物で、昭和 13 年 (1938) 5 月に竣工した。昭和 30 年代 (1955～1964) に撮影された消防出初式の写真が残っており、建具等の改変はあるものの、現在と同じ姿である。

平成 16 年 (2004) に町内の小学校が合併し、本来の役割を終えた。廃校になったのちに取り壊される予定だったが、地元で再生活用の運動がおこり、平成 18 年 (2006) 以降、「メイプルパーク」として整備されたのち、平成 25 年 (2013) より「カエデの郷ひらら」としてリニューアルオープンした。

現在は、地元の NPO 団体が施設の管理運営をしており、紅葉したカエデを見るために多くの観光客が訪れている。

7 月半ばから、この一角で音頭や踊りの練習が始まる。

【古市場みくまり会館】

木造二階建、入母屋造、スレート葺。『菟田野町史』(昭和 43 年 (1968) 8 月 菟田野町史編集委員会著) によると、もとは昭和 17 年 (1942) に藤岡勇吉氏の寄贈により建てられた宇太町役場で、昭和 32 年 (1957) に菟田野町役場が新築されるまで、町役場として使われていた。そののちは公民館として利用され、盆踊りの音頭の練習や地域の集会など、公民館活動に活用されている。



旧宇太小学校



昭和 30 年代 (1957～1964) に撮影された写真



古市場みくまり会館 外観

【龍口白山神社拝殿】

龍口神社は、龍口の集落の中央に位置する。『神社台帳』（奈良県庁文書/明治 18 年（1885））に記載されており、そのころには既に存在していたことがわかる。

本殿は木造一間社春日造、銅板葺。建立年代不詳、20 年ごとに造工をするとのことで、形式は古式を受け継ぐものの、材は新しい。境内の平場が盆踊りや獅子舞の会場となる。

拝殿は木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺。『室生村史』和 41 年（1966）/室生村史編集委員会）に現状と同じ姿で写真が掲載されており、柱等の部材も相応に古いことから、それ以前からあったと考えられる。盆踊りの際には、拝殿前に音頭台が組み立てられ、拝殿の両脇に渡した紐に家並み灯籠が掛けられる。

音頭台は地元の大工の共同作業により製作されたと伝わり、制作に加わった大工のひとり、福井萬太郎氏（1885 年～1968 年）の生没年から、少なくとも 50 年以上は経過したものと推察される。

絵を描いた障子を屋根に嵌め、竹にモールを巻き付けた花笠を棟に載せる（モールにする前は和紙をちぎって竹に糊で貼っていた。）床の中央には 60 cm 角の穴があり、音頭取りはこの穴から出入りする。通常は自治会の倉庫に解体格納されているが、盆踊りの際に組立てて使用する。



白山神社本殿



龍口白山神社拝殿と音頭台



昭和 41 年（1966）当時の
白山神社拝殿

【安産寺本堂】

木造平屋建、切妻造、棧瓦葺。明治 37 年（1904）（安産寺パンフレットによる、一次資料未発見）に建立された。国指定重要文化財 木造地藏菩薩立像が奥の収蔵庫に安置されており、子授けや安産祈願の寺として知られ、三本松中村区が守っている。

御縁日御開帳法要が 8 月の第 4 日曜日に開催され、法要のあと、本堂前の広場で準備を行い、奉納盆踊り会式を行っている。



安産寺本堂

(3) 活動

【古市場の盆踊り】

菟田野古市場の宇太水分神社の盆踊りは、「古市場納涼夏まつり」と称して、8月16日の1日のみ、19時30分～22時まで開催している（雨天時は17日に順延）。

前述の『宇太村風俗誌』（大正4年（1915）宇太村）にもあるように、神社境内で音頭台を組み、音頭取りの音頭にあわせて輪になって踊る。

盆踊りは、もとは初めて盆を迎える家を歴訪したと伝わるが、現在では神社境内で行われている。うたの納涼夏まつりと名称を変えてからも、「祭文音頭」

「金魚踊り」「住吉音頭」「炭坑節」の4つの音頭が踊られている。音頭取りが各自で作成した唄本があり、小さい紙に写し取ったものを音頭台に持ち込み、これを見ながら音頭を取る。

盆踊りは、かつては敬神青年会（地域の青年団）が運営を担い、役員は揃いの黒紋付をはおり、手提げ提灯を持って踊っていたという。敬神青年会が運営から離れて以降は、平成7年に結成された「祭文音頭保存会」が中心となり、地元自治会と協力して運営する。7月中旬からカエデの郷ひららや古市場みくまり会館にて音頭取りの練習が始まり、当日に備える。

現在の「うたの納涼夏まつり」は2部制で、第1部では昼過ぎからカラオケ大会や地元中学校吹奏楽部の演奏等の出し物が始まる。境内に露店が並び、暗くなり提灯に灯が入ると、19時30分から第2部の盆踊りとなる。

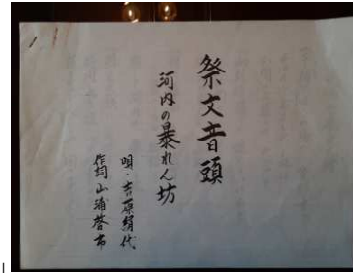
最初に、打ち上げ花火が上げられ、太鼓の音が鳴り出すと盆踊りが始まる。音頭取り4人、太鼓打ち1人、ギター1人が音頭台の上に控え、交代しながら、踊り子との掛け合いを織り交ぜ、盆踊りを進めていく。音頭は一曲30分程度あり、音頭取りが交代しながら歌う。

始まってすぐは踊りの輪は疎らだが、徐々に輪の中に人が入るようになり、輪が広がる。慣れると合いの手の声や踊りが揃うようになり、会場に一体感が生まれる。「祭文音頭」「金魚踊り」「住吉音頭」「炭坑節」のあと、少し休憩を入れて再び「祭文音頭」を踊る。盆踊りの最後に「伊勢音頭」を唄いお開きとなる。

参加者は古市場のみならず、宇陀市全域に及び、中には吉野郡から踊りに来る者もあるという。



古市場の盆踊り（1987年）



音頭取りの唄本



古市場納涼夏まつりの歴史的風致



準備風景等の写真

【龍口の盆踊り】

宇陀市の東端に位置し、名張市と接する龍口は、周囲を山に囲まれた盆地に形成された集落で、北には百地氏³⁴が築いたと伝わる山城跡が残る。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））によると、夏の盆踊りと、秋祭りの獅子舞の様子が記されており、そのいずれの行事も現在まで続いている。なお、「龍口の獅子舞」は、平成28年（2016）2月に県の無形民俗文化財に指定されている。

盆踊りについて前述の『室生の民俗』には、「当地方の盆踊りは純然たる盆踊りというより、むしろ会式踊り³⁵であって、十三日から十六日にかけて踊るのは少い」とあり、小学校区ごとに開催日が少しずつずれており、早いところは6月15日から始まり、9月10日ごろまで続いていた。おもに小学校を会場として踊っていたとある。

そんな中であって、「古風な民俗を数多く残している竜口^(原文ママ)では、八月十五日夜、村中総出で白山神社の前の広場を会場に、徹夜で踊りぬく」と記されている。現在は徹夜ではないが、白山神社の境内で盆踊りは開催されている。

龍口の盆踊りは、1990年頃までは8月24日の地藏盆に法光寺境内で、9月15日（月遅れのお盆）に白山神社境内で、年2回盆踊りを行っていた。盆踊りを年1回開催にしようと話し合った際、白山神社の盆踊りの直会で、名替え^{なが}（15歳を迎えた男子の通称を変え、成人を祝う行事）を終えた男子の宮会式^{みやえしき}

³⁴ 百地氏は名張（竜口）室生（龍口）を治めていた武士で、地頭を務めていた。百地三太夫は江戸時代の読み物に登場する架空の人物で、桃山時代に活躍した武士・忍者として描かれている。

³⁵ 『民俗探訪事典』（大島暁雄・佐藤良博・松崎憲三・宮内正勝・宮田登 編/1983年）によると、「祭は祭儀と祝祭とによって構成されており、神社神道における潔斎と祭式、仏教諸派による精進と会式が祭儀の事例にあげられる。」とあり、会式踊りは仏事の一環としての踊り、と認識されている。

（この会式を経て、集落では一人前として扱うようになる）を行う点でこちらの方を重要視する住民が多く、白山神社の盆踊りを残すことになり今に至る。現在は、8月15日に近い土曜日に白山神社境内で開催している。

音頭台は当日午後から組立てが始まる。組立てには釘は使わず、柱と床との間に^{くさび}楔を入れれば組みあがるようにできている。四方^{しほうころ}転び（4本の柱が中心に向かって同じ傾斜で立っている）や^て反りのある^{はふいた}破風板（屋根の妻の両端に設けられた板）と^{げぎよ}懸魚（破風板の下にある飾り）などから、地元の大工が^{すい}粋を尽くして作ったものであることがわかる。この地域特有の花笠があしらわれており、竹にモールを巻いた現在の仕様の前は、和紙に切り込みを入れ、糊で貼りあわせて飾っていた。

この音頭台は（2）建造物にあるように、50年以上前に製作されたものと見られている。

盆踊りは、以前は地域の青年団により運営されていたが、現在は自治会役員、氏子総代、獅子舞保存会、婦人部による共同運営で、おもに龍口の住民と^{でうじこ}出氏子（龍口出身で、現在は市外に居住する氏子）が参加する。総勢50人前後の規模の催しで、外部の参加者はそれほど多くない。

日が暮れると、神社に人が集まってくる。各世帯から「^{やな}家並み^{とうろう}灯籠」と呼ばれる提灯を持参しており、^{ひら}拝殿脇に渡した紐に吊る。進行は音頭取りが行い、太鼓や鳴り物はなく音頭取りの声に合わせて踊る。

音頭取りは現在2名、唄本はなく、先輩から聞いて覚えたものを歌う。集まつの練習はなく、本番が近くなると、各自で発声練習を行うとのこと。

盆踊りで謡われるのは「祭文音頭」「金魚踊り」「住吉音頭」「河内音頭」の4曲である。音頭取りが疲れてくると、踊り子たちから「エーコラヤー、ドッコイセー」「しっかり音頭とれ、ヨイヤサーノ



組立て中の音頭台※2



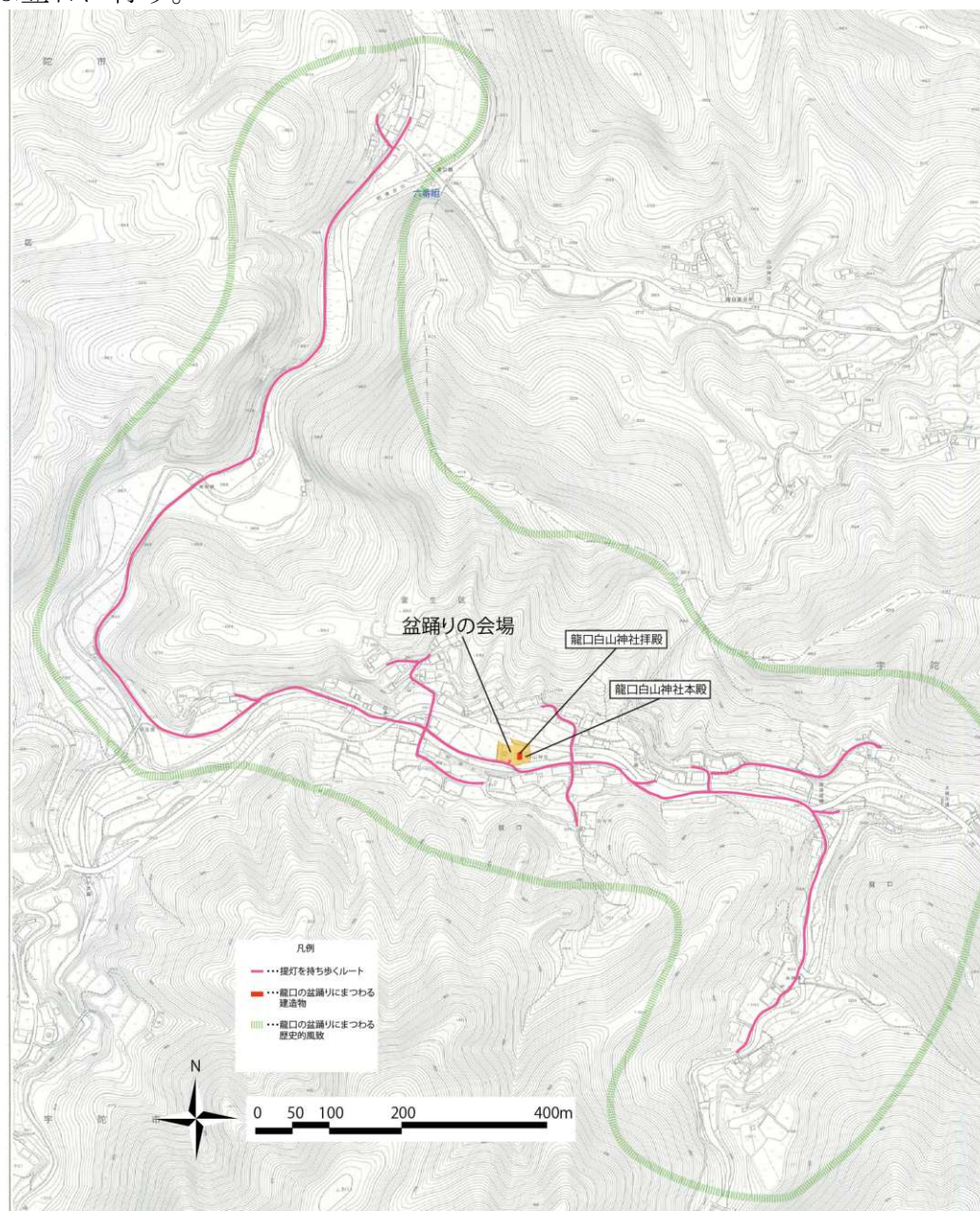
障子の屋根を嵌める。絵はその時の流行を画題にし、集落の人が描く。※2



音頭台に立つ音頭取り※2
※2 龍口自治会提供の写真

サー」などの合いの間が入り、この声に励まされ音頭取りは再び音頭に力を入れる。

23時には盆踊りを終えて、宮会式と直会を行い、未明まで宴席は続く。拝殿脇に吊るしていた「家並み灯籠」は解散ののちに各自、自宅へ持ち帰り、片付けは翌日に行う。



龍口の盆踊りにまつわる歴史的風致

【安産寺地蔵会式】

宇陀市の東、近鉄三本松駅の北側の丘に位置する安産寺は、安産祈願で霊験あらたかな「(通称) 子安地蔵」(木造地蔵菩薩立像、国の重要文化財)が安置されている。

毎月9日が縁日で、この日の午前中に子安地蔵の御開帳を行うほか、8月第4日曜日に地蔵会式を開催し、同日の夕方に盆踊りを奉納している。『三本松村風俗誌』(大正4年(1915)、三本松村)によると「オドリ 従来、會式等ニハ随分盛ンニ行ハシ、青年男女ガ夜ヲ徹シテ踊リタレモ、当今ハ 真筋ノ禁止モアル事^{ことゆえ}故行ハレズ」とあり、以前は行われていたが当時は夜通しの踊りが禁じられていた。

再開の時期は不明であるが、現在は8月の第4日曜日に開催されている。

地蔵会式は、13時から三本松の人々が集まり会式の準備が始まる。軒先に檀信徒の提灯を吊り、仏壇まわりに野菜や花などのお供えをする。

14時から^{とんこうじ}頓光寺ご住職とともに般若心経を読誦、会式を終えたら、音頭台の組立て等の準備が始まる。

盆踊りの運営は、三本松中村区が主体で行っており、安産寺本堂の床下に格納してある音頭台を組立て、花笠を載せて紅白の布を巻く。音頭取りが音頭台へ上るときは、梯子を使う。

三本松の盆踊りでは、地元の音頭取り(1名)が音頭をとり、「祭文音頭」「住吉音頭」「金魚踊り」

「子安音頭(地蔵菩薩の文化財指定を記念して作られた音頭)」の4曲を、音頭台を中心に輪になって踊る。太鼓の音と、音頭取りの音頭により、盆踊りは進められる。

境内では、たこ焼やかき氷などの模擬店が出されるほか、抽選会が行われ、参加者で賑わう。

この盆踊りには、三本松中村区が中心となり開催するが、近隣の集落からも参加がある。



安産寺境内 外観



地藏会式の日には軒に提灯を下げる



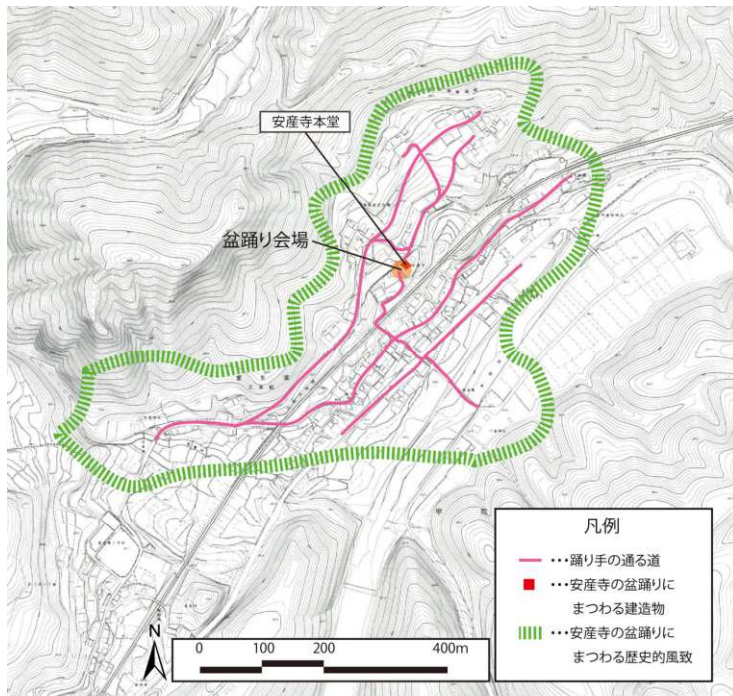
会式では般若心経を読誦



音頭台の組立て風景※3



骨格を作り花笠を飾る※3



安産寺の盆踊りにまつわる歴史的風致



屋根をかけて紅白の布を巻く※3



音頭台完成※3

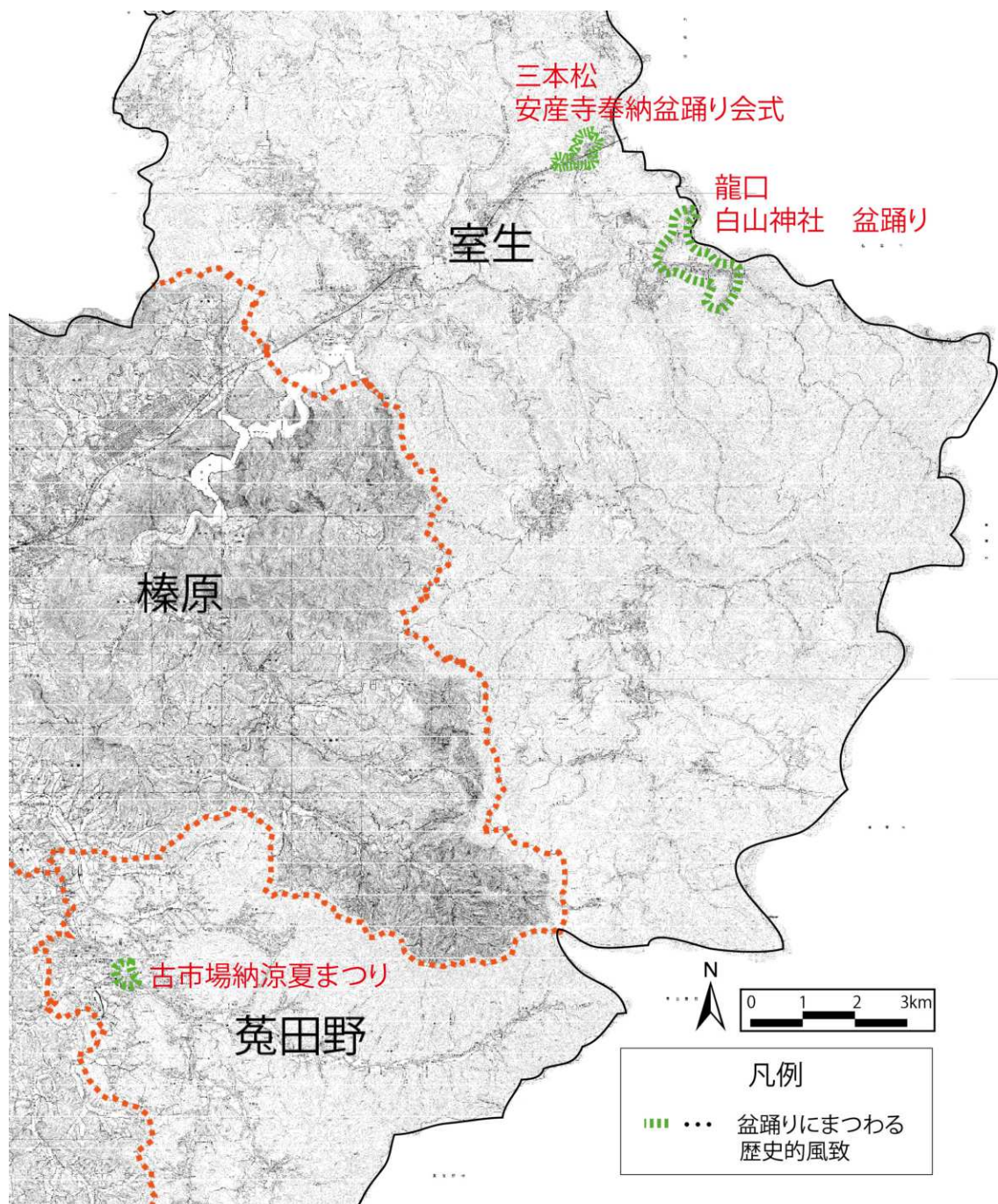


音頭台を中心に踊る※3

(4) おわりに

宇陀における盆踊りは、寺や氏神の境内、区の広場などで老若男女大勢によって踊られる。中央にタカバ（音頭台の檣）を設け、これを巡って踊る。かつては ※3 の写真は三本松自治会提供
夜通し踊ったが、社会情勢の変化により踊る時間は以前より短くなった。しかし、「祭文音頭」「金魚踊り」など、ほかの地域では途絶えた古風な音頭が受け継がれており、宇陀市内でも古市場と室生で踊り方に若干の違いが見られるという。

盆踊りは、先祖の霊を慰めるための行事である一方で、娯楽の場、地域住民の懇親の場、男女の出会いの場として、昔も今も開催を楽しみにしている人が多い行事である。盆踊りの日、地域に暮らす人がそれぞれ浴衣を纏い、提灯を下げて、昔ながらの農村風景あるいは町家群を通り抜けて至った境内で展開された踊りの輪の中に加わる様子は、境内周辺環境と相まって良好な歴史的風致を形成している。



宇陀市の盆踊りにまつわる歴史的風致

5-3 宇陀市の獅子舞に まつわる歴史的風致

(1) はじめに

獅子舞は、獅子頭を御神体として、村々を訪れて獅子舞を行い、悪魔祓いや火伏せ・息災延命などを祈禱する神楽である。宇陀市内では室生地域にいくつか伝わっており、『室生の民俗』(松本俊吉ほか、室生村役場)によると、「室生下田口の水分神社、龍口の白山神社、向淵の春日神社、室生の龍穴神社にある。そのほかに太神楽として天理市石上住の南田亀蔵の本家を継ぐ村下義雄神楽が3月下旬に無山から多田・染田・小原・笠間(上下とも)・深野へと廻ってくる。」とある。

これらの中で現在も行われているのは、下田口の田口水分神社、龍口の白山神社、室生の龍穴神社の獅子舞である。

(2) 建造物

【龍口白山神社】

4-2(2)参照

(3) 活動

【室生の獅子神楽】県指定文化財(無形民俗)

3(3)参照

【龍口の獅子舞】県指定文化財(無形民俗)

龍口白山神社の秋祭では、獅子舞が行われる。五穀豊穰と子孫繁栄を願い行われる秋祭りだが、『神社私祭調査一件』(大正7年(1918)、奈良縣宇陀郡役所)に龍口白山神社の秋祭について祭典の日時や次第順序など詳細に記されており、獅子舞は小学校児童が担当している点と開催日が異なるが、それ以外は現在と殆ど同じである。



村舞わし※2



四方※2

※2印の写真はすべて、龍口獅子舞保存会提供。

白山神社の秋祭りでは、集落内の各戸を訪ねて舞う「村舞^{むらま}わし」と、神社境内での奉納舞がある。

秋祭は、10月第4土曜日に宵宮、日曜日に本宮を行う。集落を6つの組にわけ、土曜日には4番組まで「村舞^{むらま}わし」をしたあと、祭礼を執り行う2軒^{とうや}の頭屋^{とうやま}で「頭屋舞^{とうやま}わし」をし、頭屋宅から白山神社への「お渡り行列」をしたあと、宵宮で神楽の奉納舞を行う。

翌日は、残り2組の「村舞^{むらま}わし」のあと本宮で神楽の奉納を行う。宵宮・本宮で奉納される神楽は「四方^{しほう}」「御参^{ごさん}」「悪魔祓^{あくまばら}い」「天狗^{てんぐ}」「獅子踊^{ししおど}り」の5神楽で、筵^{むしろ}8枚を広げた上で舞う。なお、「村舞^{むらま}わし」で舞うのは、「四方」「御参」「悪魔祓^{あくまばら}い」をあわせて5分程度にまとめたものである。舞い手は交代しながら、一日で40戸弱の家をまわる。獅子頭は、奉納用と村舞^{むらま}わし用とを使い分ける。

舞い手は20代から30代の若手为中心で、殆どが集落外で暮らしている。9月の水・土曜日の20時～22時に集会所に集まり練習する。お囃子と、演目ごとの舞の練習が中心で、舞い手の動きと太鼓の音を合わせている。舞い手は2名（獅子の前後）で5演目、「天狗」のみ1名追加で、少なくとも11名が必要となる。これらの芸能を受け継ぐ過程で地域の絆が深まるという。

（4）おわりに

獅子舞は宇陀市東部の集落単位でいくつか存在が確認されている。祭礼の日を迎えるまでに、入念な練習が行われ、親世代から子世代へとお囃子と演目ごとの舞が継承される。獅子舞が練り歩く集落や、舞の奉納先である神社・寺院にはいずれも伝統的な建物が数多く残り、山村の田園風景をかたちづくっている。これらの活動と歴史的環境が相まって、良好な歴史的風致を形成している。



獅子踊り舞※2



本宮の奉納風景※2

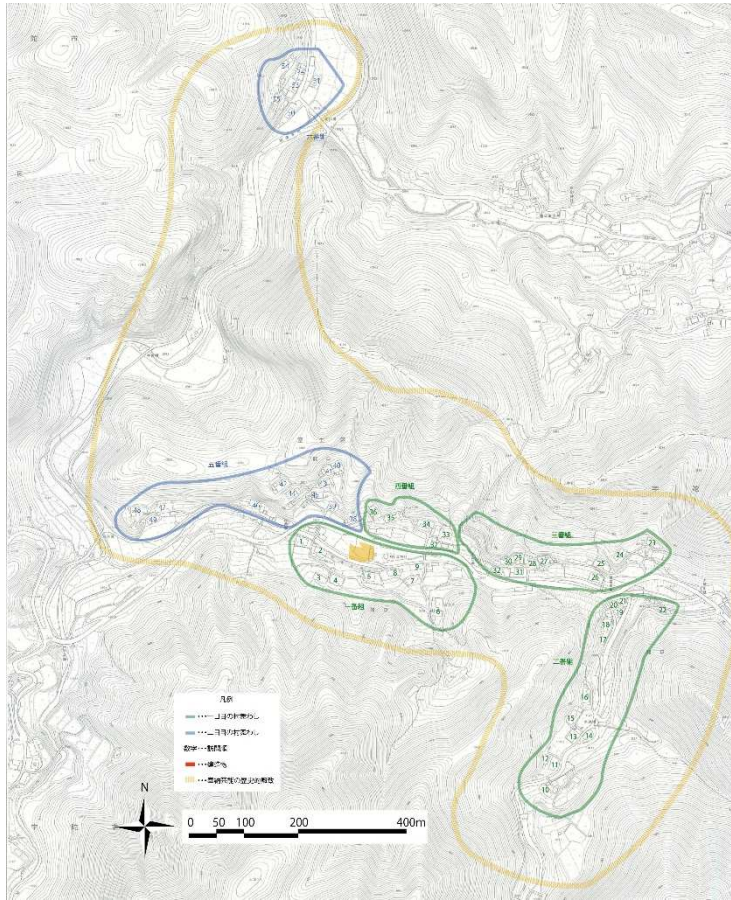


準備風景※2

※2印の写真はすべて、龍口獅子舞保存会提供。



龍口の集落（二番組、三番組）



龍口の獅子舞にまつわる歴史的風致

おわりに

「いさめ踊り」「盆踊り」「獅子舞」と、宇陀市内に伝わる奉納芸能について紹介した。かつては雨乞のため、天に最も近いダケ（古大野岳）の頂きを起点に集落の主要な場所で踊られた「いさめ踊り」は、農耕技術の発達等によりその機会が失われつつあった。しかし、現在では秋祭りにて五穀豊穡の感謝を込めて秋祭りの宵宮で奉納されるようになり、「いさめ踊り」は大野の人々に継承されてきた。

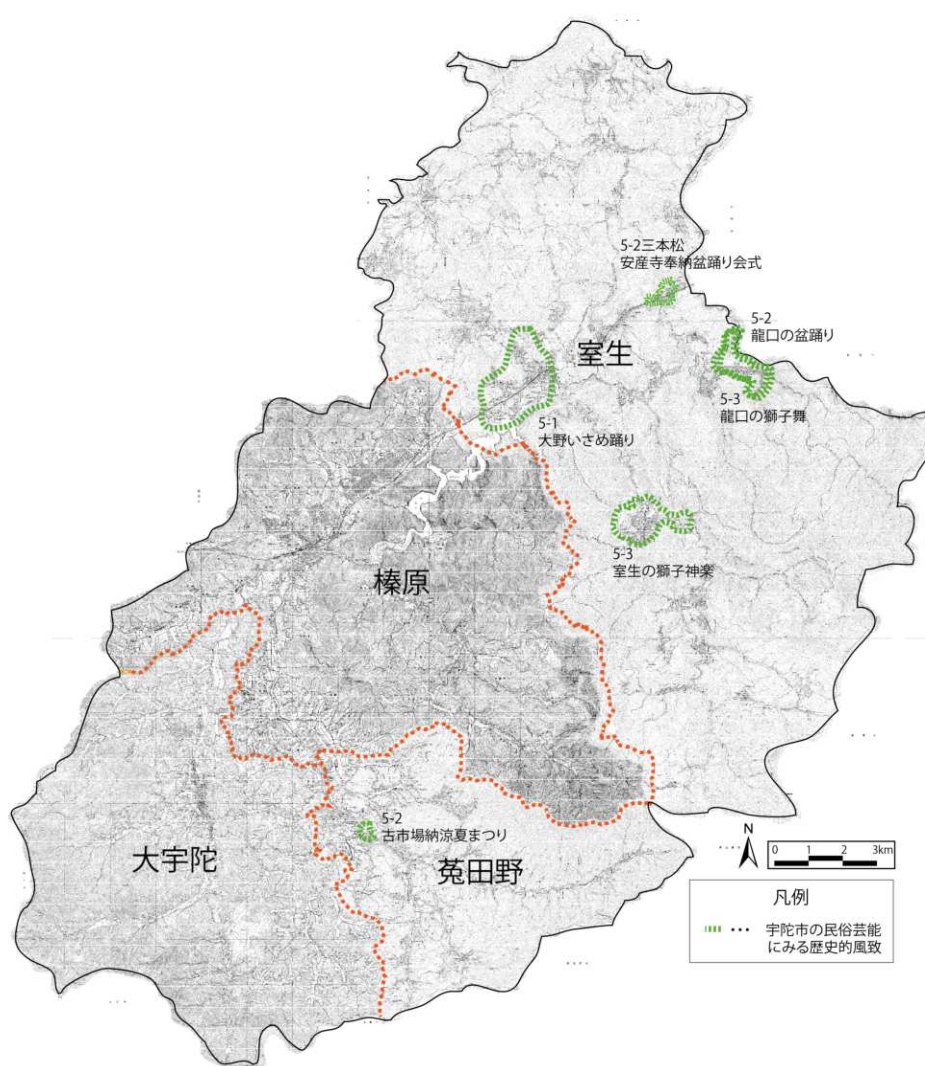
9月半ばから始まるお稽古や、宵宮、本宮で響く太鼓の音は、秋祭りの際に室生川の側に鎮座する海神社の鎮守の杜を起点に、山の斜面のわずかな平地に密集した家々の間を縫って集落の隅々へと届けられる。

また、神社や寺院の境内で、音頭台を組んで音頭取りの音頭にあわせて輪になって踊る盆踊り。全国でもさまざまな形で展開する盆踊りだが、当市では花笠を持つ音頭台の設えや、「祭文音頭」「金魚踊り」「住吉音頭」が地域固有の発展を遂げたものとされている。

昔ながらの形を残した盆踊りが開催されている場所は、山間部や町場と、成り立ちの背景は異なるが、いずれも伝統的な外観を持つ建物がよく残る環境の中心にあり、そこに据えられた音頭台から繰り出される太鼓の音や唄が周辺へと広がっていく。盆踊りの夜は、静かな佇まいとは対照的に、賑やかな音で場が満たされる。

「獅子神楽」「獅子舞」が行われる室生や龍口は、山間の谷川に沿って石積み
みの田畑が続き、山裾に茅葺や瓦葺の伝統的な家が混在して建つ。山村集落の
良好な歴史的環境を持つ集落の隅々まで出向いて行われる獅子舞は、年長者か
ら若年層へと丹念な練習を経て受け継がれている。

宇陀市内に点在する神社や寺院、集落や市街地の美しい景観の中で繰り広げ
られる民俗芸能は、その地に伝わる所作や知識の伝承を通じて地域の繋がりを
強固にするとともに、良好な歴史的風致を形成している。



宇陀市の民俗芸能にみる歴史的風致

コラム 4 阿紀神社の神事能

大宇陀地域事務所の北西に鎮座する「阿紀神社」は、本郷川沿いの鎮守の森に鎮座する。鳥居の奥の広場を挟んで左手に社務所、右手に能舞台が配され、階段を登って奥に進むと神門と瑞垣を回した神明造の本殿、脇に末社が並ぶ。

神社の来歴は定かでないが「元伊勢³⁶」のひとつで、『倭姫命世紀』に「崇神天皇六十年癸未二月十五日。遷于大和国宇多秋志野宮、積四箇年之間奉斎」とあり、倭姫命が4年にわたりこの地で天照大御神を祀ったのが起源とされている。社伝では、天正年中に現在地に遷座した由が記され、明治35年（1902）に郷社から県社に格上げされた。



『松山町概観』昭和3年(1928)
奈良県宇陀郡松山町役場発行



子ども能楽教室発表会リハーサル

この境内でひときわ目を引くのが、能舞台である。来歴は不明だが、織田松山藩の『御用部屋日記』では、延宝元年9月16日「神戸社（阿紀神社の通称）」で「神事能」を行ったとの記述がみられ、江戸期から献能があったことが伺える。

神事能のほかにも延宝6年（1678）9月17日には「信休生誕祝儀能」を催している。当時実施したこれらの催しは、「家中」や領民、領外の人々を招いて見物させている。

元禄8年（1695）の国替えにより織田家が柏原に移ったあとも、『松山町概観』（昭和3年（1928）松山町役場）の阿紀神社の解説文によると、明治維新前まで神事能は続いていた。

平成4年（1992）、大宇陀町町政50周年記念事業として、能の奉納を再開した。再開当初は4月末に開催していたが、「薪能」を「あきの蛸能」と改称し、6月中旬に開催時期を変更した。令和元年（2019）より、能の裾野を広げることを目的として「こども能楽教室」が開設され、阿紀神社の能舞台で仕舞いを披露することを目標に掲げ、宇陀市内の小中学生が能楽師から能を学んでいる。

³⁶ 豊鋤入 姫 命 が笠縫村磯城の巖櫃の本に「磯堅城の神籬」を立てて天照大御神を祀ったことに始まり、現在地に落ち着くまでに一時的に祀られた場所が「元伊勢」とされる。途中より 倭 姫 命 がこれを引き継ぎ、およそ90年かけて遷座した。以前は20箇所とされていたものが現在では60箇所を超え、詳細な伝承地については不明な点が多く、真偽のほどは不明である。宇陀市内では、阿紀神社と篠畑神社が元伊勢にあたる。